

# 哲學研究

第百七十二號

第十五卷  
第七冊

## 表現的己の自己限定

西田 幾多郎

—

我々が何物かを考へるといふことはそれを概念的に限定すると云ふことでなければならぬ、物を一般概念的に限定するといふことがそれを知ると云ふことである。併し物が概念的に限定せられるといふのは如何なることを意味するか。概念的の内容と考へられるものは言語に宿されたる表現の内容に外ならない、即ち言表の意味的内容に外ならない。我々が物について判断するといふことは先づ物について語ることではなければならぬ、判断の前に意味自體の了解、命題自體の了解がなければならぬ。物について真なる言表が判断と考へられるのである。

私は先づ表現といふものについて考へて見なければならぬ。客觀的存在にして主觀的なる意味的内容を宿すものを廣義に於て表現と考へることができる。例へば言語の如く、それは物理的音響と考へられると共に、それは單なる音響ではなく、我々の思想の表現でなければならぬ。表現に於ける意味と存在との結合については、單なる符號の如きものから藝術的作品の如きものに至るまで種々の程度を考へることが出来るであらう。併し此等のものをすべて表現と考へることができ、社會の風俗習慣制度の如きものをも廣義に於て一種の表現と考へることができる。如何にして我々にかゝる表現的内容が意識せられるのであるか。無論、直接に與へられるものはすべて自身を表現するものであり、私といふ如きものも表現に即して考へられると云ひ得るであらう。併し苟も客觀的存在と考へられるものであつて、それが主觀的意味の内容を有するとするならば、我々は先づ如何にしてかゝることが可能なるかを問はねばならぬ。存在が意味を有つといふ表現的存在或は意味的實在といふものを理解するには、我々の行爲的自己の自己限定といふ如きものから立出して考へて見なければならぬと思ふ。單に知識的には、客觀的存在そのものが自己自身の中に意味的内容を有し、自己自身を表現するといふことは考へることはでき

ない。外界を自己實現の場所と見做し、外を内と見るのは行爲的自己の立場でなければならぬ。我々の身體が自己實現の道具であると共に、その表現意義を有する如く、身體を通じて外物が自己實現の道具と見られ、更にかゝる主觀の客觀化的方向を徹底して、主觀が客觀の中に没入した時、客觀的存在そのものが自己自身の内容を表現すると考へられるのである。ヘーゲルの客觀的精神といふ如きものも斯くして考へ得ると思ふ。我々が行爲的自己の自覺の底に自己自身を没して、無にして見る自己の立場に立つ時、すべて有るものは自己自身を自覺し自己自身を表現するものとなるのである。而してかゝる立場からは、却つて所謂意識的自己と考へられるものは表現に即して見られた自己に過ぎないと云ふことができるのである。

表現といふものが右の如くにして考へられるものとすするならば、判断とは物が物自身について語ることでなければならぬ。客觀的存在が自己の客觀的内容について語ることでなければならぬ。我々の自己が無にして見るものとなる時、かゝる自己に於て見られるものはすべて自己自身について語るものでなければならぬ。かゝる無にして見る自己のノエマ的自覺の極限に於て、客觀的存在がその客觀的存在について語ると考へられるのである、かゝる物そのものゝ物語が眞のロゴスである。

客觀的思惟とは我々の行爲的自覺からノエシスの限定の意義を極小にしたものに外ならない、客觀的思惟とは語るものなくして語ることである。行爲的自己の立場から見れば、物は道具であり、外界は意志實現の場所と見られるであらう。併し無の自覺の立場に於ては、見られるものは自己自身を表現するものとなる、即ちその一つが見られた自己の意義を有するのである。すべて表現の野に於てあるものは見られた自己の意義を有し、ノエマ的方向とノエシスの方向とを有つと考へることができる。そのノエマ的限定の極限に於てあるものが物と考へられるものであり、かゝる物を限定するノエマ的自覺が思惟と考へられるものである。見られた自己が自己の意義を失つた時、物となるのである、自己にしてそのノエシスの限定の意義を失ひ、單にノエマ的限定の意義を有つたものが物と考へられるのである。

以上述べた如く表現的限定といふのは無にして見る行爲的自己の自覺的限定の意義を有し、思惟といふのもかゝる自己の自覺的限定の意義を有するとすれば、物を概念的に限定すること即ち知るといふこともかゝる自己の自覺的限定の意義を有せなければならぬ。自覺といふことは自己が自己に於て自己を見るといふことで

あり、物が概念的に限定せられるといふことは表現的自己によつて自己が自己を語ることでなければならぬ。行爲的自己が無にして自己自身を見る時、見られるものは自己自身を表現するものとなり、自己自身を語るものとなる、即ち見られた自己の意義を有つたものでなければならぬ。併し無にして見る自己そのものは固見られないものであるから、物は單に「於てある」と考へられ、自己に於て自己を語る自覺者そのものは、唯物が之に於てあり之によつて限定せられる場所と考へられる外はない。「自己が」といふものは見られない時、單に「自己に於て」の面のみが見られるのである。かゝるロゴスの場所ともいふべきものが私の所謂一般者と考へるものであり、かゝる場所的限定の内容が所謂一般概念と考へられるものである。故に我々の概念的知識はかゝる一般者の自己限定から始まる、判断とはかゝる一般者の自覺的限定を意味するに外ならない。或物について述語するといふことは、自己が自己に於て自己を見るが如く、ロゴスの自己が自己の限定面に於て自己を限定することではなければならぬ。

それで私の一般者の自己限定といふものを理解するには、表現的自己の自覺的限定よりせなければならぬ、言表は勝義に於ての表現である。而して表現的限定を

理解するには、行爲的自己の自己限定によらねばならぬ。私の所謂一般者の自己限定といふのは廣義に於ける行爲的自己の自覺として理解すべきである、判断といふのも一種の行爲と見ることが出来る。自覺といふのが自己に於て自己を見ると考へられる時、それは無限の過程であり、その極限に於て知的自己を見ると考へられる。併し眞に自己自身を見るものはかゝる知的自己を内に包むものでなければならぬ、情意的自覺に於て我々は更に深い自覺を見るのである、對象を内に包むものとなるのである。併し自己が自己の中に包まれた自己を見て居るかぎり、それは何處までも尙行爲的自己の自己限定でなければならぬ。行爲的自己の自覺に於ても既に知的自己の自覺を包むを以て外を内となすといふ意義を有し、無にして有を限定する意味を有つてゐるのであるが、未だ意識的自己を見るといふ意味を脱しないかぎり、尙眞に無にして見るものとは云はれない。見られる物そのものが直に自己の表現と考へられる時、はじめて眞に無にして見るものとなるのである、内が外となり外が内となるのである。意識的自己が自己に於て自己を見る意識面は、行爲的自己に至つて體驗的意識面となると考へ得るが、體驗的意識面といへば尙主觀的意義を脱せない。更に自己を客觀の中に没入することによつて、それは表現の野となる、公の場

所となるのである。言語について云へばロゴスの場所となるのである。表現の野に於てあるものは、無にして自己自身を見る自己の自己限定としてノエマ的限定の方向とノエシスの限定の方向との兩方向を有つて居る。而してかゝる自己のノエマ的自覺といふべきものが私の所謂一般者の自己限定と考へるものである。故に一般者に於て主語的有として自己自身を限定するものは、最も深き意味に於て行爲的に自己自身を自覺する行爲的自己の意義を有し、表現の野に於て行爲的に自己自身の内容を限定することが自己自身について述語することである。

すべて我々が我々の意識内容を言ひ表すといふことは行爲的自己の立場に於ていなければならぬ、言表も一種の行爲である。之に反し我々の行爲と考へるものも、自己自身の内容を客觀的に見るといふ意味に於て、表現の意義を有すると云ふことができる。單なる表現はノエシ的に不完全なる行爲の意義を有し、單なる行爲はノエマ的に不完全なる表現の意義を有すると考へることがができる。一は無にして見る自己の抽象的ノエマ的限定の意義を有し、一はその抽象的ノエシスの限定の意義を有するのである。具體的意識と考へられるものは自ら表現的意義と行爲的意義とを有つ、その一方に傾いたものが知覺的と考へられ、他の一方に傾いたものが衝

動的と考へるが、固衝動的ならざる知覺はなく、知覺的ならざる衝動はない。唯そのノエシスの限定が所謂行爲的自己として尙主觀的と考へられるかぎり、それは無にして見る自己の自覺的限定の立場ではない、未だ眞の行爲的自己の立場に至つたものとは云へない。かゝる自己が行爲的自覺に至つた時、その表現的内容は無にして見る自己の自覺的内容としてイデヤ的となるのである。私の一般者の自己限定と考へるものはかゝる自己のノエマ的自覺を意味するものである。故に行爲的自己の自己限定と考へられたものはかゝるノエマ的自覺のノエシスの限定に包含せられるかぎり、それは行爲的自己の自己限定の意義を失うて、自己自身を主語として限定すると考へられるのである。無にして見る自己のノエシスの限定といふことは廣義に於て行爲といふことであり、かゝるノエシスの限定の意義を極小にしたものが判斷作用と考へることができ。無にして見る自己は自己自身を行爲的に限定して行く、その極限に於て行爲的自己が自己自身を失つた時、自己自身を表現するものとして、無にして見る自己の自覺の中に包まれるのである。此故に私の一般者と考へるものはヒポケーメノンとして行爲的自己を内に包む意味を有つて居るのである。



我々の概念的知識といふのは右に云つた如き一般者の自己限定に基くと考へざるを得ない、即ち表現的自己のソエマ的自覺に基くのである。アリストテレスのいふ如く歸納的論證と一般概念の限定とがソクラテスの功に歸せねばならぬとするならば、ソクラテスによつてロゴスがその自覺に達したのである。或物を概念的に限定して行くといふことは表現的自己が言表的に自己の中に自己を限定して行くことである。一つの物を他から區別し、更にそれを又他から區別して行くには、先づすべてを包む一般者がなければならぬ、一般者が自己に於て自己を限定して行くのである。分類法といふ如きものも表現的自己の自己限定として理解することができる。例へば色の分類が成立するには先づ色の意識がなければならぬであらう、併し單に色の意識によつて色の分類的知識が成立するのではない。表現的自己の自己限定の内容として色自體といふ如きものが見られることによつて、色の分類的知識が成立するのである。色自體と考へられるものは表現的自己の自己限定の内容としてイデア的に見られるものに外ならない。表現的自己の自己限定の内容として言表せられたものは、無にして見る自己の自己限定の内容として客觀的と考へられねばならぬ。プラトンのイデアといふのは右の如くにして無にして見る自己

678

の自覺的内容即ち表現的自己の自覺的内容として考へられるものでなければならぬ。行爲の目的と考へられたものは、行爲的自己が自己自身を失ふと共に單なる意味となり、行爲は單なる意味の了解となる。之を逆に表現的自己の自己限定の方から云へば、行爲とは未だ無にして見る自己に至らない見られた自己の過程であり、目的とは未だ直觀に至らないイデア的内容に過ぎない。意味として行爲的自己を離れた時始めて表現的自己の内容に屬するのである。併しそれは尙イデア的内容ではない、表現的自己が自己自身の内容を見た時イデアと考へられるのである。而してかゝる自覺的限定が判断と考へられるのであり、行爲が判断作用となるのである。イデアの分取によつて知識が成立すると考へたプラトンの一般的なるものゝ自己限定によつて判断が成立すると考へた。併しプラトンのイデアは見られたもので見るものではない、一般者の自己限定の内容であつて自己自身を限定する一般者ではない、自己の中に自己を見えものではない。見られたものから見る作用は出て來ない、プラトンのイデアには自己自身を限定する所以のものが明でない。一般的なるものが自己自身を限定するといふには、それが自己自身の中に發展を含み、自己に於て自己を限定する私の所謂一般者の自己限定といふ如きものでなければならぬ。

かゝる一般者の自己限定の内容としてイデヤが動的意義を有するのである。アリストテレスはプラトンに反し判断的知識の基礎を主語となつて述語とならない個體に置いた、一般的なるものは却つて自己自身を限定する個物的なるものに含まれると考へた。自己自身を限定するイデヤといふものを徹底的に考へて行けば、かゝる考に到達せざるを得ない、自己自身を限定するイデヤは個物的でなければならぬ。私の所謂表現的一般者の自己限定といふのが自覺的限定として自己に於て自己を限定して行くとすれば、その極限に於て自己自身を表現的に限定し自己自身は表現的に限定せられないものに撞着せなければならぬ。それがアリストテレスの所謂ヒポケーメノンでなければならぬ。併しそれは何處までも自己に於て自己を限定する自覺的限定の極限として考へられるものでなければならぬ、自己に於てあるものでなければならぬ。之を越えれば自覺的意義を失ふと共に、判断的に自己自身を限定するといふ意義も失はなければならぬ、ロゴスの場所に於て述語を有つことはできなくなるのである。

概念的知識と考へられるものは判断の形に於て言ひ表はされるものでなければならぬ、物について判断するといふことは物を述語的に限定することである。述

語的に限定せられ得るかぎり物が知られるのである、述語的限定の中に入り來らないものに就いて我々は何事も云ふことはできぬ、物とも云ひ得ないのである。かゝる立場から云へば主語的なるものは述語的なるものゝ自己限定と考へることができ、述語的なるものゝ自己限定が知るといふことでなければならぬ。プラトンはかゝる立場に立つたと考へることが出来る。アリストテレスはプラトン學派のイデアとはソクラテスの一般概念を獨立の實在と考へたものだと云つて居る。併し元來、述語的なるものとは如何なるものであるか。一般概念の内容と考へられるものは固言表の内容でなければならぬ、了解の内容となる意味といふ如きものでなければならぬ、それ自身に於て何等の限定を有つといふことのできないものである。述語的なるものが主語的なるものを限定すると考へられる時、即ち述語的なるもの自己限定によつて知識が成立すると考へられる時、述語的なるものといふのは單なる了解の内容といふ如きものではなくして、私の所謂自己自身を限定する一般者といふ如きものでなければならぬ。

我々の意識の底には行爲的自己があり、行爲的自己の底は無にして見る表現的自

己の自己限定に通ずるを以て、意識的自己の立場から見れば、我々の意識内容は直に體驗の内容として、言語といふ如き表現的行爲によつて言表せられて意味となる。考へられる。併し表現的自己の立場から云へば、行爲的自己の自己限定といふも無にして見る自己の自己限定といふべく、客觀的なる意味の世界といふのは表現的自己が自己に於て自己を限定する限定面的内容と考へることができる。故に言表に宿されたる意味の世界と考へられるものは、一方から見れば我々の意識内容の言表と考へることができ、一方から見れば表現的自己の限定面的内容といふことができ。無にして見る自己のノエマ的限定面たる表現的自己の限定面とそのノエシス的限定たる行爲的自己の限定面との接觸面に於て見られるのである。かゝる接觸面的内容として意味の世界はそれ自身に何等の自覺的意義を有せざるものと考へられ、自己自身の限定を失つた意識面即ち表象的意識面からは單に志向的對象界と考へられ、行爲的自己の自己限定の立場からは單に了解の内容と考へられるの外はない。併し表現的自己の自己限定と云ひ、行爲的自己の自己限定といふも、固無にして見る自己のノエマ的限定とノエシス的限定とを意味するのであるから、無にして見る自己の限定面的内容として意味の世界と考へられるもの、そのものが、自ら兩方

面への限定の意義を有し、無にして見る自己が自己自身を限定するかぎり、それは何等かの自己限定の意義を有たねばならぬ。而して行爲的自己の限定に屬するかぎりそれはドクサと考へられ、表現的自己の自己限定に屬するかぎりそれはイデヤと考へられるのである。我々が普通に一般概念と考へるものは了解の内容として寧ろ行爲的自己の限定面的内容の意義を有つたものでなければならぬ、寧ろドクサ的内容といふべきである。かゝる意味の述語的内容からして我々判斷的知識を限定することはできない。無論、表現的自己は自己自身の内容をその限定面たる意味の世界に於て有たねばならぬ、物が述語的に限定せられることによつて我々の判斷的知識が成立するのである。併し無にして見る自己の未自覺的なる行爲的自己の自己限定から判斷的知識が成立するのではない。行爲的自己が自己自身を失ふことによつて表現的自己の意義を有し、かゝる自己の自覺的内容として判斷的知識が成立するのである、前にも云つた如く判斷は表現的自己の自覺的行爲である。唯、意味の世界は行爲的自己の自己限定面と表現的自己の自己限定面との接觸面的内容なるを以て、行爲的自己の自己限定面は直に表現的自己の自己限定面の意義を有し、了解の内容として一般概念と考へるものは表現的自己の自己限定面的内容と考へ

ることが出来る。自己に於て自己を見る表現的自己の限定が、そのノエマ的限定の極限に於てそのノエシスの限定の意義を失ひ、見られた自己が自己の意義を失つて物となつた時、物は表現的自己の自己限定面たる意味の世界即ち述語面に於て自己自身の内容を限定すると考へることが出来る、即ち物は述語的に自己自身を限定することによつて知られると云ふことが出来る。物が自己自身を述語的に限定するといふことは、表現的自己がノエマ的に自己自身を限定することである、ノエマ的に自覺することである。而して表現的自己の自己限定面は直に行爲的自己の自己限定面たる意義を有するを以て、我々の意識内容は述語的内容たる意義を有し、表現的自己の自己限定は意識的自己の立場から物を知ると考へられるのである。表現的自己の自己限定に裏附けられた意識的自己の自己限定が知るといふことであり、それが所謂判断作用と考へられるものである。行爲的限定は固無にして見る自己の未自覺的なるノエシスの限定の意義を有し、意識的自己の自己限定が行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎり、知るといふことが成立するのである。單なる分類的知識の如きものであつても、それが客觀的と考へられるかぎり、それは單に意識内容として成立するのではなく、上に云つた如く色の意識が感覺作用として行爲的自

己の自己限定と考へられ、行爲的自己の自己限定は無にして見る自己の未自覺的限定として、その底にイデヤ的内容たる色自體といふものが見られなければならぬ。而してかゝる内容が表現的自己の自己限定の内容として言表的に自己自身を限定することによつて、分類的知識といふ如きものが成立するのである。行爲的自己の自己限定が表現的自己の自覺によつて裏附けられるかぎり分類的知識が成立するのである、逆に尙行爲的自己として未だ自覺に至らない表現的自己の自己限定の内容と云つてよい、所謂色の意識と考へられるものはその抽象的ノエシスの限定の内容に過ぎない。行爲的自己の自己限定の内容として見られた時、色の意識といふのはそれ自身に内面的統一を有つた無限の連続でなければならぬ。かゝる内面的連續の自己のノエシスの限定の方向に藝術の色といふ如きイデヤ的内容が見られると共に、表現的自己のノエマ的限定の方向に之に對應する色自體といふ如き主語的なるものが見られ、かゝる主語的なるものゝ體系が表現的自己の自己限定の内容として色の分類的知識といふ如きものが成立するのである。故に分類的知識と考へられるものは不完全なる判斷的知識である、未だ眞にノエマ的自覺に達せない表現的自己の自己限定の内容と云つてよい。



述語的なるもの即ち一般的なるもの、自己限定によつて判斷的知識が成立するといふことが右に述べた如き意味でなければならぬとするならば、それによつて客觀的眞理が限定せられると考へたプラトンのイデアはアリストテレスのヒポケイメノンとしての個物の如きものに至らなければならぬ。表現的自己の自己限定の内容としてロゴスに於てあるものはノエマ的方向とノエシス的方向とを有つて居る。イデア的内容と考へられるものは元來そのノエシス的限定の方向に於て見られるものでなければならぬ、行爲的自己の底に見られるものでなければならぬ。行爲的自己の自己限定が表現的自己のノエシス的限定の意義を有するかぎり、之に對してそのノエマ的限定の方向に主語的有が見られるのである。無にして見る自己のノエマ的限定の方向に進むに従つてノエシス的限定の内容は減少せられて行かなければならぬ、その極限に於ては主語となつて述語とならないアリストテレスのヒポケイメノンといふ如きものとならなければならぬ。イデアの直觀といふことは固無にして見る自己のノエシス的限定の方向に於て云ひ得ることではなければならぬ。未自覺的なる表現的自己といふべき行爲的自己がそのノエシス的限定の極限に於て無にして見る自己の自覺的限定に達した時、イデアの直觀といふものが

成立するのである。故に勝義に於てイデヤの直觀と考へられるものは藝術的直觀の如きものでなければならぬ。眞理のイデヤと考へられるものはそのノエシス的限定を極小にしたノエマ的自覺の内容たるに過ぎない。ソクラテスを繼承したと考へられるプラトンのイデヤは元來徳のイデヤ美のイデヤといふ如きものではなかつたらうか、饗宴やバイドロスに於ける憧憬の對象といふ如きものがイデヤの本質ではなからうか。それが形而上學的となり論理的となるに従つて、イデヤは私の云ふ如き無にして見る自己のノエマ的自覺の内容と考へられねばならぬ。無にして見る自己の自己限定がそのノエマ的方向に進むに従つて、見られた自己は自己の意義を失うて物となる、單に主語となつて述語とならないヒポケーメノンといふの外ない、その内容はもはや「見られる」といふ意義を失ふのである。カントが我々は直觀的理解力を有たないと云つた如くイデヤの直觀の意義がなくなるのである。併しアリストテレスの個物といへども、苟もそれについて概念的知識が成立すると考へられる以上、私の所謂一般者の自己限定の外に出たものであつてはならぬ。それは何處までも主語となつて述語とならない主語的方向の極限に於てあるものと云ひ得るであらう。併しそれは又何處までも述語可能性を有つものでなければなら

ぬ、述語的限定の意義を脱せないものでなければならぬ、無にして見る自己のノエマ的限定の極限に於て見られるものでなければならぬ、無にして見る自己の自覺的限定によつて基礎附けられて居るものでなければならぬ。無にして見るといふ自己のノエシスの限定は何處までも深まり行くことと考へることができ、イデアの内容を見ることのできないうまで深まり行くことと考へることができ。その極限に於ては、自己自身を言表的に限定するが言表的に限定せられない主語的なるものがなければならぬ。それは表現的自己が自己自身の自覺的内容を見るときいふ意味に於ては見られないものでなければならぬ。同じく見られるものとしてイデアと云つても、私は眞理のイデアと考へられるものは善のイデアや美のイデアとはその性質を異にして居るものと思ふ。プラトンのイデアが眞實在として概念的知識の基礎と考へられる時、それはアリストテレスのエンテレケーヤの如きものとならなければならぬ。プラトンもその晩年に於てはそれに近いたと考へ得るであらう。それはエーロスといはんよりも寧ろエネルギーといふべきものである。併しアリストテレスのエネルギーヤも尙何處までもエーロスの下なればならぬ。何處までもドゥナメオスなるものにエネルギーヤ的なるものが先立つのである、個人は個人か

ら生れるかも知れない、併し人は人から生れるのである。

これまで述べて來た所を總括して云へば、我々の概念的の内容と考へるものは言表に宿されたロゴス的内容であり、概念的知識といふのは言表的自己の自己限定の内容に外ならない。言表的自己が自己自身の内容を限定するといふことが判断といふことであり、かゝる自己の自覺的内容が眞理と考へられるものである。併しすべて表現的自己在自身の内容を限定するといふには、我々の行爲的自己在自己限定の底にその自覺的内容が見られなければならぬ、即ちイデア的なるものが見られなければならぬ。行爲的自己在自己限定と考へられるものは表現的自己在ノエシスの限定を意味するものである。斯く表現的自己在のノエシスの限定たる行爲的自己在の自己限定の底に見られたイデア的なるものがそのノエマ的限定の極限に於て主語的、有と考へられ、我々が行爲的自己として赤いものを見たといふことは、表現的自己在の自己限定の立場に於て「此物は赤い」として言表せられるのである。而して我々の自覺的限定といふことは、自己在自己に於て自己を見ることであり、如何なる自己限定といへどもかゝる意義を有するを以て、物が判斷的に限定せられる、即ち判斷

的知識が成立するといふにも、表現的自己が自己に於て自己を見るといふ意義がなければならぬ。而もそれはノエマ的自覺の極限として、もはや見るといふ如きノエシスの限定の意義を失ふを以て、單に物はそれに於てあり、それによつて限定せられといふの外はない。私の一般者の場所といふのは、かゝる意味に於て表現的自己の自覺面といふ如きものを意味するのである。故に物は一般者の場所に於てあり、自己自身の内容をその限定面即ち述語面に於て限定すると云ひ得る。述語面といふのはロゴスの世界を意味するのである、行爲的自己によつて裏附けられ意識的自己の立場から云へば、それは志向的對象界たる客觀的意味の世界である。一般者の自己限定によつて判斷的知識が成立するといふのは斯くして云ひ得るのである。表現的自己が自己自身を限定する自覺面即ち私の所謂一般者の場所といふのは個物が之に於てあり之に包まれるものとして、外延的限定の意義を有つたものでなければならぬ、それは主語的有を限定するものである。而して行爲的自己のノエマ的限定の立場に於て意味化せられた我々の意識内容がその内包となるのである。分類的知識の構成といふ如きものも右の如き自覺面の自己限定として考へられなければならない。

我々の概念的知識にその基礎を興へたものはギリシヤ哲學といふことができ、私もそこから出立したから、イデアの内容を見ることによつて判断的知識が成立する云つた。併し近代のカント哲學に於いていふ如き我々の客觀的知識はイデアを見ることによつて成立するのではない。眞の客觀的知識は事實が事實自身を限定する絶対無のノエマ的自覺の立場に於て成立するのである。此に表現的自巳のノエマ的自覺の極限といつたものはかゝる立場への接近を意味するのである。後に至つて明になると思ふ。

## 二

私は表現的自己が自己自身の内容を限定するには、行爲的自己の自己限定の底に自覺的内容が見られねばならぬ、即ちイデア的なるものが見られねばならぬと云つた。表限的自己といふも自覺的意義を有するかぎり、その内容はそのノエシス的限定たる行爲的自己の限定の底に見られなければならない。ノエシス的限定の底に見られる行爲的自己の自覺的内容のノエマ的に限定せられたものが表現的的自己の自己限定の内容と考へられるのである。併し行爲的自己の自己限定の底は何處までも深く、無にして見る自己のノエシス的限定の極限に至るを以て、行爲的自己のノエシス的限定の意義が深くなければなる程、表現的的自己の自己限定としてノエマ的に限定することはできぬ、深いイデア的内容は客觀的に見ることはできないのである。善のイデアといふ如きものは何處までも實現することのできないものである、更に歴史のイデアの如きものに至つては内に見るといふことすらできないものである。

唯、美のイデヤに於ては行爲的自己のノエシスの限定と表現的自己の自己限定即ちそのノエマ的限定とが合一すると考へられるが、美のイデヤとは單に表現的自己のノエマ的自覺の内容ではない、行爲的自己のノエシスの限定が即ノエマ的限定たる意味に於て行爲的自己の自覺の内容を意味するのである。之に反し眞理のイデヤとは無にして見る自己のノエマ的限定がノエシスの限定の意義を有するといふ意味に於てのイデヤである、即ち表現的自己の自覺面的内容に外ならない。故に美の内容は直に眞理の内容とは云はれない。それでは如何なる意味に於て、イデヤの内容が表現的自己の自己限定の内容となると云ひ得るであらうか。イデヤの内容が表現的自己の自覺的内容となるにはイデヤ的内容としてノエマ的なるものでならなければならぬ。行爲的自己の自覺的内容としてイデヤ的なるものにも亦ノエマ的方向とノエシスの方向とを見ることのできる。すべて表現の野に於てあるものは兩方向を有つと考へられる如く、そのノエシスの自覺即ち行爲的自覺の内容も廣義に於て表現の野に於てあるものとして、ノエマ的限定の意義を有たなければならぬ。如何なるものがイデヤ的内容としてノエマ的と考へられるものであるか。私は我々が内部知覺の事實として考へるものが、イデヤ的内容のノエマ的なるもの

と考へることができると思ふ、即ちノエマ的イデヤ的内容である。我々の意識的自己の背後には行爲的自己がある、行爲的自己の立場から云へば、そのノエシスの限定の意義を極小にしたものが意識的自己と考へられるものである。我々の内部知覺的自己即ち意識的自己の自己限定と考へられるものが、イデヤ的なるものゝノエマ的内容を限定するのである。故に我々はイデヤ的なるものを我々の内部知覺の事實として考へ、イデヤ的なるものを内に見ると考へるのである。行爲的自己の自己限定といふのは内を外と見、外を内と見ることである、我々が我々の自己を對象的に見ることのできるのはかゝる立場に立ち得るが故である、即ち無にして見る立場に立つが故である。かゝる立場からその無にして見る自己の自己限定の意義即ち行爲的自己のノエシスの限定の意義を減して行けば、我々が所謂内的自己と考へるものゝ立場に近づく、而して我々は先づ體驗的自己の立場といふものを考へることが出来る。併し體驗の立場といふのは尙外を包むといふ意義を有つて居る、客觀的なものを内に包む意味を有つて居る。更に之から外を包むといふ行爲的自己の自己限定の意義を減却したものが、意識的自己の立場となるのである。故に意識的自己の自己限定は生理的心理學者の考へる如く却つて外からの限定とも考へること



ができる、表現的自己のノエマ的限定とも考へられるのである。意識的自己の自己限定といふにも種々の階段が考へられ、その自己限定の意義を極小にしたものは表象的意識といふ如きものであらう。それは單に志向的にして何等の自覺的限定の意義を有せないとも考へることができる。併し我々の意識的自己が行爲的自己によつて裏附けられ、自覺的限定の意義を有するかぎり、之に於てイデア的内容が見られねばならぬ。イデア的内容と考へられるものは行爲的自己の自覺の立場に於ける内部知覺の事實の意義を有し、内部知覺の事實と考へられるものは意識的自己の立場に於けるイデア的内容の意義を有つてゐなければならぬ。表現的自己のノエマ的自覺的限定とノエシスの自覺的限定とは事實的内容として相觸れるのである。故に私が見るといふ内的事實は直に客觀化せられて外的事實となる、事實的内容としてノエンス的自覺の内容は直にノエマ的自覺の内容となるのである。それで表現の野に於て「有るもの」といふ意味を有つたものは事實的なるものである。事實的なるものが表現の野に於てあるものとして、ノエシスの限定とノエマ的限定との兩方向を有つのである。嚮に我々の意識内容が意味の世界となると云つたが、表現的自己の限定といふのが無にして見る自己のノエマ的限定としてその自覺的限定の

意義が否定せられたと考へられる時、そのノエシスの限定の方向に於ては、意識的自己が單に表象的意識として志向的となり、我々の意識内容と考へられたものが客觀的限定の意義を失うて、單に意味の世界といふものが成立する。自覺的限定の意義を失つたノエマとノエシスとの限定は意味の世界に於て相觸れるといふことができる。併し表現的自己が自覺的限定の意義を有つた時、兩方向の限定は事實の世界に於て相觸れると考へることができる。行爲的自己の自覺的内容たるイデア的内容が事實として見られるかぎり、表現的自己のノエマ的自覺の内容として概念的知識が成立するのである。

私の表現的自己の自己限定といふのは無にして見る自己の自己限定を意味し、無にして見る自己の自己限定は固絶對無の自覺によつて裏附けられてゐなければならぬ。そのノエシスの限定即ち行爲的自覺の底は深く絶對無の自覺のノエシスの限定に至ると共に、そのノエマ的限定の底には絶對無の自覺のノエマ的限定が見られなければならない。表現の野に於てあるものは、そのノエマ的限定の方向に於ては絶對無の自覺のノエマ的限定によつて基礎附けられ、そのノエシスの限定の方向に於ては絶對無の自覺のノエシスの限定によつて基礎附けられて居なければなら

ぬ。而してすべて自覺的限定といふのは自己に於て自己を見ることなるを以て、行爲的自覺の方向に於てイデア的内容が見られるかぎり、そのノエマ的限定の方向に於て表現的自己の自己限定として「有るもの」が見られるのである。併し元來無にして見る自己の自己限定といふのは自己が見られなくなることを意味するのである、自己が無となることでなければならぬ、無にして有を限定することではなければならぬ。行爲的自覺といふ如きものが考へられるかぎり、それは未だ眞に無にして見る自己の自覺に至らないのである。故に行爲的自覺の意義が深くなり、絶對無の自覺によつて裏附けられるに至れば、歴史的自己の自己限定に於ての如くもはやイデア的内容が見られなくなるのである。斯くしてノエシスの限定の方向に於て絶對無の自覺のノエシスの限定によつて裏附けられると共に、表現的自己の自己限定の方向に於て絶對無の自覺のノエマ的限定の意味が現れて來なければならぬ。我々が事實の世界と考へるものはかゝる意味に於て見られるものでなければならぬ。それはイデアを見ることのできなない深い行爲的自己即ち自己自身を失つた行爲的自己の自己限定の内容といふことができる。行爲的自己の自覺的内容としてはそれは内部知覺の事實たるそのノエマ的限定の内容といふべく、表現的自己の自己限定

の内容として、それは既に絶對無の自覺のノエマ的限定によつて裏附けられ、その自己限定の意義をも失つたものとして單なる客觀的事實と考へることが出来る。上に表現的自己の自己限定に於てノエマ的限定とノエシスの限定と相觸れると云つたのは、それが絶對無の自覺によつて裏附けられることによつて可能となるのである。行爲的自己の限定が深くなるに従つて、表現的自己の自己限定の内容と考へられるものが絶對無の自覺のノエマ的限定の意義を有つて來る。我々の知識と考へるものは固、絶對無の自覺のノエマ的限定の意義を有つたものである。見られるものゝ立場から云へば、表現的自己の自己限定は行爲的自己の自己限定よりも廣く、之を包む意味を有つて居なければならぬ。絶對無の自覺のノエマ的限定の意味を深めて、ノエシスの限定の方向に於て行爲的自覺の意義が失はれたと考へられる時、見られるものはもはや事實の世界ともいふべきものでもなくして、單なる意味の世界となるであらう。ノエシスの限定として單に無自覺的なる表象的意識といふ如きものが殘されるまでである。元來、表現的自己の自己限定といふのは絶對無の自覺のノエマ的限定によつて基礎附けられて居るのであるから、その根柢には絶對に不可知なるものがなければならぬ。而もそれが絶對無の自覺的内容としてノエ

シ的に限定せられるかぎり表現的自己の自己限定の内容と考へられるのである。ノエシスの自覺の意義に於てはそれはイデア的内容として見られるものとなるのである。併し右の如き絶對無の自覺のノエマ的内容として不可知なるものがノエシ的に限定せられるといふ時、それはそれ自身の中に何等の自覺的限定の意義を有せない表現の内容といふ如きものでなければならぬ。表現的限定といふのは未だ何等の自覺的限定の意義を有せない行爲的限定と考へることが出来る。而してかゝる限定の内容として先づ我々の言語に宿されたる意味の世界といふものが考へられるであらう。私の一一般者の自己限定といふのはかゝる意味に於ける表現的自己の自己限定を意味するものであつて、絶對無の自覺のノエマ的限定によつて基礎附けられた無にして見る自己の自己限定である。一般者の場所と考へられるものはかゝるノエマ的限定の自覺面といふことができる。無論、それは自覺面と云つても、自己に於て自己を見るときいふ代りに、於てあるものを限定し有るものは之に於てあるといふ如き自己限定面でなければならぬ。之に於てあるものは言表的に自己自身の内容を限定するものである。斯く一般者の場所といふのは絶對無の自覺のノエマ的内容を限定する意味を含むものとして、既にそのノエシス的限定の

意義を含むと考へることができらう。それが絶對無の自覺のノエシスの限定の方向に深まるに従つて、行爲的自己の自己限定として自己に於て自己を見るといふ自覺面の意義を有つて來るのである。一般者の自己限定が絶對無の自覺のノエシスの限定の意義を含むものとしてはそのノエマ的限定を自己限定と見る意義を有すると考へ得るであらう。併し絶對無の自覺的限定といふのは、そのノエシスの限定の方向に於て達すべからざるものなると共に、そのノエマ的限定の方向に於ても達すべからざるものなるが故に、かゝるノエマ的限定の内容は行爲的自己の立場からは、それ自身の中に何等の自覺的限定の意義を有せない意味の世界といふ如きものと見られねばならない。併しかゝる表現的自己の自己限定の内容として見られた意味の世界が自己自身の自覺的限定の意義を有つた時、我々の事實の世界と考へるものが成立するのである。事實の世界といふのが表現的自己が自覺的限定の意義を有つた時見られる最始の世界である、一般者の場所に於てある意味を有つたものゝ最初のものど云ふことができる。事實の底には深くして見るべからざるものゝ自己限定がある、それは絶對無の自覺のノエマ的限定によつて基礎附けられて居るといふことができる。そしてそれが行爲的自己の自己限定の意義を有する

意識的自己の自己限定の内容として見られるかぎり、内部知覺の事實と考へられるのである。事實の世界に於て表現的自己の自覺的限定と行爲的自己の自覺的限定とが合一すると考へられるのは、共に絶對無の自覺的限定の意義を有つと考へることができる。絶對無の自覺の立場から云へば、そのノエマ的限定の内容がそれが絶對無の自覺のノエマ的内容の意義を有するかぎり、客觀的事實と考へられ、それがそのノエシスの限定の意義を有するかぎり、内部知覺の事實と考へられるといふことができる。

意味の世界と事實の世界との關係について後に至つて明になると思ふが、表現的自己の自己限定といふのは固、絶對無の自覺の抽象的ノエマ的限定と考ふべきものなるを以て、その自覺的限定は自ら絶對無のノエマ的自覺の意義を有し、かゝる自覺的内容が事實の世界と考へられるものである。之に反しその抽象的ノエマ的限定の意義を徹底すれば、無自覺なる表現的自己の内容として意味の世界といふものが考へられるのである。かゝる抽象的ノエマ的限定が可能なのは絶對無の自覺のノエシスの限定の方向に於て、そのノエマ的自覺即ち知的自覺を越えて更に深いものがあること云ひ得るであらう。自己自身の内容を自覺的に見ることのできないノエシスの限定に對應してかゝる抽象的ノエマ的限定が成立すること考へることができる。我々の意識的自己の自己限定について云つてもそれが行爲的自己の自己限定から行爲的限定の意義を極小にしたものと考へられるが、後に云ふ如くそれが又表現的自己のノエシスの限定として何處までも之に伴うて行くといふ意味に於ては、却つて行爲的自己の自己限定を越えるといふ意味を有つて居ると考へることができ、内的事實が即外的事實と考へられるのは之に由るのである。

絶對無の自覺のノエシスの限定といふのは見るものなくして見る自己の極限に

至ることである、ノエシスの限定の方向に我として見られるものが絶對になくなることである、すべて「有るもの」が無の自己限定と見られることである、有るがまゝに無となることである。併し有が即無であるといふことは單に何物もないと云ふことではない、その一々が絶對に有るものとなることである、絶對の事實となることである、一々が我々の自己否定の意味を有つて居ることを意味するのである。我々の事實的限定と考へるものが絶對無のノエマ的自覺の意義を有つたものである。事實的といへば「時」によつて限定せられたものが考へられるかも知らぬが「時」といふのはかゝるノエマ的内容の範疇的限定を意味するに過ぎない、所謂事實と考へられるものはかゝる内容の判斷的に言表せられたものに外ならない。アウグステヌスが時に過去、現在、未來があるのではなく、寧ろ過去の現在、現在の現在、未來の現在があるのと云ふが過現未を包む現在の内容ともいふべきものが私の所謂絶對無の自覺のノエマ的内容と考ふべきものである。それで私は絶對無の自覺によつて裏付けられた表現的自己の自己限定の内容と考へられるものはすべて事實的なものと考へたい。かゝる場合、一般にザツハリツヒと考へられるかも知らぬが、ザツハリツヒと考へるのは我々の意識の本質を志向的と考へる故であらう。意識の



根本的形式を自覺的と考へるならば、それはザツハリツヒではなくしてタートサツハリツヒでなければならぬ。表現的自己の自己限定といへどもノエシス的に行爲的自己の自己限定の意義を有し、之に對し客觀的に迫り來るものは單にサツハリツヒでなくしてタートザツハリツヒでなければならぬ。意識的限定が受働的と考へられる時、それがタートの意義を失つて單にザツハリツヒと考へられるのである。併し表象的意識といふ如きものでも之を自覺的限定のノエシス的限定の意義を極小にしたものと考へられるならば、ザツハリツヒなるものであつてもタートザツハリツヒのタートを極小にしたものと考へねばならぬ。表現的自己の自己限定が絶對無の自覺に觸れる所に事實的なるものが見られるのである。その底には絶對無の自覺のノエマ的限定の内容として神祕的なるものがなければならぬ、過現未を包つた現在の如きものが神祕的内容を限定すると考へることもできるであらう、事實の底にはいつでもイデヤを否定するものがあるのである。併しイデヤ的なるものは何處までも事實的なるものに即して考へられるのである、何處までも事實的なるものゝ性質を失はないのである。絶對無の自覺のノエマ的内容といふものが一方に客觀的事實としてイデヤを否定する意義を有すると共に、一方に内部知覺的

事實としてイデア的内容の意義を有つのである。而してイデア的内容といふのは何處までも内部知覺的事實の意義を失はないのである。客觀的事實と考へられるものゝ底には、絶對無の自覺のノエマ的限定があると考へられるが如く、内部知覺の事實と考へられるものゝ底には、絶對無の自覺のノエシス的限定の意味が含まれて居ると考へることができる。内部知覺の明證と考へられるものは無の自覺の意義を有つたものである。我々の内部知覺の事實と考へられるものも、それが明證的と考へられるかぎり、絶對無の自覺のノエシス的限定によつて裏附られたるものなればならぬ、私はそれを深い廣い意義を有つたものと考へたいと思ふのである。イデアを見るものとして叡智的自己と考へられるものも内部知覺の自己の意義を深めたものに過ぎない。それは絶對無の自覺によつて裏附けられた表現的自己のノエシス的限定面即ち廣義に於ける行爲的自己の自己限定面に於てあるものである。絶對無の自覺のノエシス的限定によつて裏附けられた内部知覺の自己即ち叡智的自己が、絶對無の自覺のノエマ的限定面に於て、ノエマ的に自己自身の内容を限定したものがイデア的内容と考へられるものである。イデアの内容とは何處までも暗く非合理的なるものを限定する絶對無の自覺のノエマ面に映されたるノエシ

的限定の内容と考ふべきである。故に我々の自己が絶対無の自覺に近づき、自ら無にして對象を内に包むといふ意味が深くなるに従つて、イデア的なるものは見られなくなる。云ふことができるのである。此論文は概念的知識の成立を論ずるを目的としたが故には、はじめ表現的自己の自己限定面に於てあるものを考へ、それをノエマ的方向とノエシス的方向とを有つと云つたが、その背後に絶対無の自覺といふものを考へ、かゝる絶対的自覺に於て裏附けられた表現的自己の自己限定面に於てあるものを考へれば、それは事實的なるものと云ふことができるであらう。表現的自己の自己限定といふも既に我々が表現作用といふ如き自己限定が見られて居るのである、見られた自己の自己限定といふことができる、眞に無にして見る自己の自己限定ではない。眞に無にして見る自己の自己限定面に於てあるものは事實的なるものでなければならぬ、而してそれがノエマ的限定とノエシス的限定との兩方向へ考へられて行くのである。眞に無にして見る自己の自己限定面に於ては、内部知覺の事實は即客觀的事實であり、客觀的事實は即内部知覺の事實である。絶対無の自覺といふのは無限に自己の中に自己を限定することを意味し、之に於てあるものから見ればそれは無限の兩極端から限定せられて居ると考へることが出来る。内

部知覺的自己と考へられるものはそのノエシスの限定の方向に考へられたものであり、物と考へられるものはそのノエマ的限定の方向に考へられたものである。物の底に絶對無の自覺のノエマ的限定として無限に非合理的なるものがあり、内部知覺的自己の底には無限なる自由がある、それは絶對無の自覺のノエシスの限定として、何處までも物を包む意味を有つて居る。かゝる自己限定の意義が行爲的自己の自己限定と考へられるものであり、それが自己限定の内容として非合理的なる物を包み得るかぎり、そこにイデヤが見られるのである。それでイデヤの内容とは事實的なるものが絶對無の自覺のノエシスの限定の方向に深まつたものである。イデヤ的なるものはいつでも事實的なるものから出立せなければならぬ、イデヤは空に浮べるものではない。内部知覺の事實と考へられるものが、行爲的自己の自己限定の意味に於て既にイデヤ的内容の意義を有つたものである。此故にそれは絶對無の自覺的内容として疑ふべからざる事實の意義を有つのである。内的明證といふのは絶對無の自覺のノエマ的限定とノエシスの限定と觸れる所に現れるのである、絶對無の自覺的限定を意味するものである。絶對無のノエシスの限定によつて基礎附けられ、客觀的對象を包む意義を有する行爲的限定が、そのノエシスの限定の方

向に深まるに従つて、イデヤ的内容が見られる。而もそれは何處までも行爲的自己の自己限定の内容として内部知覺的事實の意義を有するのである。イデヤ的内容とは我々の内部知覺的事實と考へられるものが行爲的自己のノエシス的内容限定の方向に深められたものに過ぎない、而も内部知覺的事實が即客觀的事實であるといふ如き主客の合一性を失はないものである。その底から見れば、イデヤは絶對無の自覺的内容の意義を有し、それ自身に於て明證的なる事實の意義を有するものである。美のイデヤの如きものであつてもかゝる意味に於ての事實性を失はないのである。それは行爲的自己のノエシス的内容として所謂客觀的事實の意義を離れると云つても、それが絶對無の自覺的内容の意義を有するかぎり自證的事實の意義を有し客觀的意義を失はないのである。美的判断は之に基いて成立するのである。上にも云つた如く所謂内部知覺的事實と考へられるものも、行爲的自己の自己限定が絶對無の自覺のノエマ的限定に觸れる所に見られるのである。それが絶對無のノエマ的自覺に觸れるといふ意味に於て、自證的事實として客觀的と云へば、最も客觀的と云ひ得るであらう、併し客觀を包むといふ意味に於ては最も小なるものである、かゝる事實が單に主觀的と考へられる所以である、客觀を包む人格的内容は

内に見られるイデア的事實でなければならぬ。斯くしてイデア的内容と考へられるものは行爲的自己の自己限定の内容として客觀的對象を包むといふ意味を有つて居るのであるが、イデア的と考へられるものにも色々あり、一方に於て内部知覺の事實と考へられるものもイデア的と考へられると共に、我々の行爲的自己の自己限定と考へるものがその極限たる絶對無の自覺のノエシスの限定に近づくに従つて、歴史的イデアと考へられるものゝ如く却つてイデア的意義を失ふと考へることもできる。元來、絶對無の自覺に於ては見るものは絶對の無となるのであるから、ノエマ的に見られるものは事實的と考へられねばならぬ。従つて事實的なるものも、絶對無の自覺の立場からは、そのノエシスの限定に基礎附けられた意義を有すると共に、行爲的自己の自己限定の内容と考へられるものも、固事實的なるものでなければならぬ。それでは絶對無の自覺の立場から見てイデア的内容とは如何なるものであるか。すべて自覺的限定に於てノエマ的限定面とノエシスの限定面とは相離れたものではなく、唯その兩方向の極端に於て考へられるものであるが、ノエシスの限定面はいつもノエマ的限定面を包むといふ意味を有つて居なければならぬ。單なるノエマ的限定面と考へられるものは、却つてノエシスの限定面がノエマ的限

定面を包み込んだ時、即ちノエマ面がノエシス面の中に陥ち込んだ時見られるものである。ノエシス面がノエマ面を包み込んだのではなく、單に何處までも之を包むといふ意義を有つた時、ノエマ面に於てあるものはノエシス面に於てあるものゝ自己限定の無限なる過程と考へらればならぬ。併しノエシス面がノエマ面を包み込んだ時、ノエシス面に於てあるものは最早ノエマ面に於て限定すべからざるものといふ意味を有つて來る、無にして有を限定するものとなる過程として見られるものではなくして過程の中に包むものとなるのである。前の場合に於て志向作用といふものが考へられるとすれば、後の場合に於ては意志作用といふものが考へられる而して斯く過程としても限定することのできないノエシス面的内容と考へられるものは、ノエマ面的限定の方から見ればそれは自己自身の中に自己限定の意義を有せないノエマ面的内容として單なる意味と考へられ、ノエシス面的限定の方から見ればノエマ面的限定の意義を越えたノエシス面的内容として自由なる意志的内容と考へられるのである。斯く自覺的限定の兩極端に於て相反する二つの抽象面的限定といふものが考へられるのであるが、その中間に於てノエマ面とノエシス面との合一面ともいふべきものが考へられねばならぬ、それが我々の直覺面と考へるもので

ある。それに於ては自己自身を限定する、自己が自己をノエマ的に見る即ち自覺するといふことができるのである、對象が對象自身を限定するのである。單に兩面が合一すると云つても、ノエマ面にノエシス面が合一する時そこに單なる直覺面と考へられることができ、ノエシス面にノエマ面が合一すると考へる時そこに眞の自覺面といふものを考へることができ。イデヤ的内容と考へられるものはかかる意味に於て絶對無の自覺のノエシスの限定とノエマ的限定との合一面的内容といふべきものである、事實的なるものが行爲的に自己自身を限定するかぎりイデヤ的内容が見られるのである。絶對無の自覺のノエマにノエシスが合一するといふ意味に於ては、それはすべて内部知覺の事實といふ如き直接所與の意義を有し、ノエシスにノエマが合一するといふ意味に於ては、行爲的自己の自覺的内容としてイデヤ的と考へられるのである。行爲的自己の自己限定と考へられるものは、固絶對無の自覺に於てノエマを圍んだノエシスの限定、ノエマの縁暈をなすノエシスの限定に過ぎない、ノエマ的限定に即して見られる絶對無の自覺のノエシスの限定といふべきものである。内部知覺的自己から叡智的自己に至り、更にその底にある自由意志と考へられるものに至るまで、皆かゝる意義を有つて居るのである。行爲的自己と考



へられるものはすべてかゝる意味を有つて居るのであるが、自由意志と考へられるものに於ては直に絶對無の自覺のノエシスの限定に觸れると考へることができない。故に自由意志に於ては却つてイデア的内容を内に包み、之を否定する意義を有つのである、加之絶對無の自覺的限定として事實的とも考へられるのである。我々は自己の自由意志の底を知ることができない、我々の自由意志の底には却つて深い非合理的なるものがある、その故に自由意志は無内容とすら考へられるのである。併しそれは單に非合理的とか無内容とか云ふのではなく、絶對無の自覺のノエシスの限定に裏附けられることによつて、如何なるノエマ的限定をも越えて之を包むといふことを意味するのでなければならぬ。絶對無の自覺的内容といふべきものは行爲的自己と考へられるものに對して單なる事實といふの外にない。我々の意識的自己の自己限定の内容が内部知覺的事實として即客觀的事實と考へられるのも、それが絶對無の自覺的限定によつて裏附られて居ることを意味するものでなければならぬ。我々の自由意志的自己と考へられるものは、かゝる立場の極限にまで深められたものでなければならぬ。故に自由意志的自己とは自己自身の行爲を見るものである、それが絶對無の自覺のノエシスの限定に結び付いて居るといふ點に於て

は歴史を見るものである、歴史を自己自身の限定として之を内に包む意味を有つていふことができる。我々の自己が絶対無の自覺のノエシスの限定に裏附けられたものとして事實的なるものを見るといふのは固、歴史的なるものが見られるのでなければならぬ、すべて事實的なるものは先づ歴史的事實の意義を有つてゐなければならぬ。自然科学的事實と考へられるものはそのノエマ的方向に考へられたものでなければならぬ。かふいふ意味に於てイデヤの事實性といふのは歴史的事實の意味を有つたものでなければならぬ。イデヤは歴史的自己の自覺的内容と考へることもでき、歴史的 사실이イデヤの質料といふこともできる。併し我々が歴史といふ如きものを考へる時、それは既に廣義に於ける行爲的自己の立場に立つて居るのであつて、寧ろ自己自身の内容を自覺的に見ることのできない、即ちイデヤの内容を見ることのできない深い行爲的自己の自己限定といふべきである。

絶対無の自覺のノエマ的内容と考へられるものは事實的なるものでなければならぬ、イデヤも事實的でなければならぬ。事實的なるものがノエシ的に自覺すると考へられるかぎりイデヤ的なるものが見られるのである。絶対無の自覺のノエシスの限定と考へられるものは廣義に於て我々の生命と考へられるものでなければならぬ、事實が事實自身を限定すると考へられる時、それが我々の生命と考へられるものである。かふいふ意味に於てイデヤは我々の生命の内容でなければならぬ。無論、生命の底に

は何處までも深いものがある、生命そのものはイデアとして見ることはできないものである。唯それが行爲的に自覺すること考へられるかぎり、イデア的と考へられるのである。行爲といふのは生命の自覺を意味するものである、事實に即してノエマ的に自己を見ることである、即ち絶對無のノエマ的自覺に即して見られるノエシスの限定である。併し生命の自己限定には行爲的限定といふより更に深いものがなければならぬ。生命の内容にはイデア的に見ることはできないものがある、否イデアを否定するものがあるのである。

私は是に於て我々の概念的知識がそれによつて成立すると考へられる表現的自己の自己限定なるものを、その根柢より明にし得るかと思ふ。何等かの意味に於て自己が見られるかぎり我々は眞の絶對無の自覺に至ることはできない、我々は唯自己自身を失ふことによつてのみ絶對無の自覺に至るのである。此故に我々の自己に對して絶對無の自覺的内容と考へられるものは唯事實的といふの外はない、我々は事實的なるものに於て絶對無の自覺的内容に觸れるのである、否私といふものがそれに觸れるのではなく、かゝる事實の自己限定が眞の私であるのである。直接に與へられるものといふもの程、眞の私といふ意味を有つて居るのである。非合理的なるものゝ合理化無にして有を限定する、そこに私といふものがあるのである。内部知覺的事實が即客觀的事實であり、客觀的事實が即内部知覺的事實であるといふ

のも、かゝる立場に於てでなければならぬ。絶対の事實と考へられるものは、絶対無の自覺のノエマ的内容といふ如きものでなければならぬ。而して斯く絶対無の自覺的内容として與へられたものは、自己自身を限定するものとしてノエマ的方向とノエシス的方向への無限なる限定の意義を含むと共に、逆にそれは無限の兩極端から限定せられて居ると考へることが出来る。無論、絶対無の自覺に於てもノエシスがノエマを包む意義を有し萬法唯心といふべきであるが、自己に於て自己を限定するものが絶対の無となるが故に、之に於てあるものからは斯く考へることが出来る。加之、ノエマ面がノエシス面に包まれるといふ意味に於て、之に於てあるものは無限に動き行くと考られるのである、事實が事實自身を限定して行くと考へられるのである。その一步一步が肯定と共に否定であり、その一々の中に自己矛盾を含んで居るのである。元來、事實といふものが我々に認められねばならぬといふことその事が非合理的なるものゝ合理化として、それ自身に矛盾を含んで居るのである。無にして自己自身を限定するものの内容として眞の事實といふものが考へられるのである、事實的限定の底には無にして自己自身を限定するものがなければならぬ、然らざればそれは働きであつて事實ではない、アウグスチスの云ふ如き過去現在未

來を含む現在が事實を限定する認識の形式でなければならぬ。斯くして絶對的事實の根柢には絶對に無にして自己自身を肯定するものが考へられねばならないと共に、之に反する方向に於て絶對に無にして自己自身を否定するものが考へられねばならぬ。即ち絶對無の自覺のノエシスの限定として我々の自覺的限定の底に絶對に無にして單に見るものといふものが考へられ、そのノエマ的限定として之に反する方向に於て絶對に無にして單に映すものといふものが考へられねばならぬ。否定といふ如き意味を有するかぎり、それは尙自己限定の意義を有つて居るのである。逆に働くものゝ意義を有つて居るのである。絶對に無となつた時單に映すといふの外にない、絶對無の自覺のノエマ面といふのは單に映す鏡といふ如きものである。而してその鏡そのものが直に自己を見るものであり、自己自身を見るものが鏡そのものであるといふのが絶對無の自覺である。我々の表現的自己の自己限定といふのはかゝる絶對無の自覺のノエマ面的限定に基礎附けられて居るものでなければならぬ。行爲的自己の自己限定といふのは無にして自己自身を限定することである、行爲的自己とは無にして自己自身の内容を見るものである。かゝる自己の自己限定の内容がイデヤと考へられるのである、イデヤ的内容とは事實的なるもの

ノエシスの限定の方向に於て見られるものである。之に反し絶對無の自覺のノエマ的方向に於てはイデヤを否定する意義が含まれて居なければならぬ、事實的限定の一面にはイデヤ否定の意義があるのである。私が前に表現的自己が自己自身の内容を限定するには行爲的自己の自己限定の底に自覺的内容が見られねばならないと云つたのはその事實的なるものが見られるといふ意味でなければならぬ、抽象的にはそれが事物的と考へられるものである。絶對無の自覺的内容として事實的なるものは、そのノエシスの限定の方向に於ては行爲的自己の自己限定の内容としてイデヤ的意義を有つて居る、之に反しそのノエマ的限定の方向に於てはイデヤを否定する意義を有つて居る。行爲的自己の自己限定の内容としてイデヤ的と考へられるものは表現的自己の自己限定の内容として實體的と考へられねばならぬ。絶對無の自覺のノエマ的限定面に於ては行爲的自己と考へられたるものはその自覺的意義を失つて主語的有と考へられるのである。表現的自己の自覺的限定といふのは實體的なるもの、自己限定といふことでなければならぬ、即ち主語的有の自己限定といふことでなければならぬ。かゝる自己限定が判断と考へられるものである、判断は自己的意義を失つた自己の行爲である。無論、絶對無の自覺のノ

エマの限定の極限に於てはすべての自覺的意義が否定せられるであらうが、それが表現的自己の自己限定として廣義に於て尙行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎり、かゝる自己限定が見られるのである、即ち事實的なるものが主語的有として範疇的に限定せられるのである。併し更に之をイデヤ否定の方向に進むれば、全然非合理的なるものとして自己限定の意義が失はれなければならぬ、範疇的に限定すべからざるものとなる。絶對無のノエマの限定によつて裏附けられた表現的自己の自己限定の底には表現もできないものがあるのである、否表現を否定するものがあるのである。

絶對無のノエマの限定の内容として表現的限定の底にあるものは眞に直接に與へられたものとして *fals bruis* さもいふべきものである、唯符號的に表現するの外はない。物理的知識の如きものですら、近代の物理学に於ての如く符號的と考へられるのである

### 三

行爲的自己の自己限定の立場から云へば、我々は事實と考へるものに於て絶對無の自覺的内容に觸れると考へることができらうであらう。我々は外に非合理的に自己を限定する事實を見るのみならず、内に非合理的に自己自身を限定する事實を見る、而してその極限に於ては外の事實は内の事實であり内の事實は外の事實である。

絶對無の自覺的内容と考ふべき事實的なるものに於て内と外とが合一するのである。そこに二種の事實があるのではない、事實が事實自身を限定し、そのノエシス的限定の意義とノエマ的限定の意義によつて内と外とに分れるのである。過現未を包む現在といふものが眞の時の形式とすれば、それがアウグスチヌスも云ふ如く直に我々の記憶の形式である。かゝる絶對無の自覺の立場から云へば、イデヤも事實といふことができ、而もそれは不完全なる事實といふべきであらう。逆に行爲的自己の立場から云へば、ここでは事實が即イデヤといふことができるであらう。事實が事實自身を限定して行く、そのノエシス的限定の方向に行爲的自己の自己限定といふものが見られ、そのノエマ的限定の方向に表現的自己の自己限定といふものが見られるのである。事實といふも、我々は往々事實の背後に事實そのものを限定するものを置いて考へるが、斯く考へられた時それは眞の事實といふべきものではなくて、性質とか作用とか考ふべきものである。眞の事實は事實が事實自身を限定するものでなければならぬ。事實が事實自身を限定するといふことは限定するものなくして自己自身を限定するといふことでなければならぬ、それは過現未を包む現在の内容でなければならぬ、一々の瞬間が無限の過去未を包む瞬間でなければなら



ぬ。絶對無の自覺のノエマ的限定といふのは斯く考へられなければならない。是故に之をそのノエシス限定の方から見れば、それは直に自己である、一々の事實そのものが直に自己であり、自己そのものが直に事實である、眞の事實は自己そのものでなければならぬ。上に云つた如く事實と考へられるものは元來歴史的事實でなければならぬ、自然科学的事實と考へられるものは過去と未來とを極小にした平面的なる現在の内容に過ぎない、自覺的意義を極小にして記憶の内容である。かういふ意味に於ては自然が歴史に於てであると云つてよい。

絶對無の自覺のノエシスの限定といふべきものは眞に見られるものなくして自己自身を限定する自覺的限定として、深い内的生命と考へられるものであらう。行爲的自己の自己限定の底には、かゝる内的生命があるのである、そこにはベルグソンの純粹持續といふ如きものを見ることができらう。之に反しそのノエマ的限定といふべきものは絶對に無にして單に映すといふ意味を有つてゐなければならぬ。絶對無の自覺のノエマ面と考へられるものは單に映す鏡といふ如きものでなければならぬ、之に於て限定せられるものは單なる事實といふ如きものでなければならぬ。併し自己自身を映す鏡といふ如きものが自己自身を映す自己を失

つた時それは單に表現の野といふ如きものとなる。之に於てあるものは事實的なものではなくして單に物の影といふべきものである、而して單に自己自身を限定するものゝ内容を表現するのである。我々の意識面が自覺的と考へられるかぎり、之に於てあるものは所謂内部知覺的事實といふ如きものでなければならぬが、それが自覺的意義を失つた時、單に志向的意識面と考へられると同様である。表現の野に於てあるものは行爲的に自己自身を限定する行爲的自己の自覺的内容の影を映すものとして、之を志向すると云ふことができる、即ちイデヤを志向するものである、イデヤを對象とするものである。かゝる意味に於て自己自身を映すものを失つたノエマ面的内容即ち單なる表現的限定の内容と考ふべきものが單なる意味の世界と考へられ、のである。言語といふ如きものに於ては事實的なもの、所謂實在的と考へられるものが自己自身の中に意味を含んで居るのではない、即ち事實的なものが直に自己自身を言表するのではない。表現の内容とそれを宿すものが互に外面的である、言語は符號的である。之に反し自己自身を限定する事實そのものと考へられるものは絶對無のノエマ的自覺の内容としてそのノエシシ的限定の意義を有つて居なければならぬ、それは自己自身を自覺的に限定するものゝノエマ面

的内容でなければならぬ、行爲的に自己自身を限定する意味を有つて居るのである。絶對無の自覺のノエシスの限定の方向に於て行爲的自己の自己限定といふものが見られるかぎり、事實的なるものがそれ自身の中に意味を有し自己自身を表現するものとなるのである。藝術的作品といふ如きものは勝義に於て斯く考へられるものであらう。歴史的事實といふ如きものに至つては、既に絶對無の自覺的限定の意義を有するものとして、事實が事實自身を限定すると云ひ得るのである。自己自身を表現するのみならず、自己自身を表現するものを内に包む意味を有つて居るのである。

絶對無の自覺に於ては見るものもなく見られるものもない。併しそれが我々の自覺的限定の極限として考へられるかぎり、之に於てあるものは自己自身を限定して行く、事實が事實自身を限定して行くど考へられるであらう。かゝる自己限定が自覺的ど考へられるかぎり、そのノエシスの限定の底には何處までかゝる限定を越えて絶對に無にして自己自身を限定するものが考へられ、そのノエマ的限定の方向には絶對に無にして單に映すといふものが考へられねばならぬ。絶對無の自覺のノエシスの限定といふものが抽象的に考へられた時、それは限定するものなくして

無限に自己自身を限定するヤコブ・ベームの「對象なき意志」といふ如きものと考へることができ、そのノエマ的限定が抽象的に考へられた時、それは單に映す鏡といふべきであらう。かゝる單に映す鏡といふ如きものが絶對無の自覺のノエマ的限定面としてすべての行爲的自覺の内容を映すと考へられた時、それが表現的自己の限定面と考へられるものである。すべて行爲的自己と考へられるものは之に於て自己自身の内容を限定すると考へることができる。併しかゝる限定面が絶對無の自覺のノエマ面たる意義を有するかぎり、すべての行爲的自己の自覺的限定を否定する意義を有つてゐなければならぬ、之に於てすべての行爲的自己の自覺的内容が意味化せられるといふことができる。單なる表現的限定の内容としては意味の世界といふものを考へることができるのである。言語といふ如きものが勝義に於て表現的自己の自己限定と考へられるものであり、表現的自己の自己限定の世界はロゴスの世界といふことができる。而して表現的自己の自己限定と考へられるものが絶對無のノエマ的自覺として反動的に行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎり、表現的自己の自覺的限定として判断といふものが成立するのである。即ち表現的自己の自覺的内容として事實的なるものを見るかぎり判断といふものが成立するの

である。判断とは事實的なるもの、自己言表といふことができる。最初にイデア的内容の言表といつたが、イデアは絶対無の自覺の立場に於ては事實の意義を有し、かゝる意義を有するかぎり、それによつて判断的知識が成立するのである。無論、絶対無の自覺の立場に於て事實が即イデアでありイデアが即事實と考へ得るかも知れぬが、表現的自己の自己限定が絶対無のノエマ自覺の意義を有するかぎり、イデア否定の意義を有つてゐなければならぬ。眞のヒポケーメノン是自己自身を限定する事實そのものでなければならぬ、即ち表現的自己の自覺的内容でなければならぬ。主語となつて述語とならざる個物といふ如きものを尙イデア的に考へられる所に、アリストテレスの哲學の破綻があると思ふ。絶対無の自覺のノエマ的限定面と考へられるものはすべての行爲的自己を否定しその内容を映すといふ意味を有すると共に、それ自身がノエシスの限定の意義を極小にした絶対無の自覺的限定として、何處までも行爲的自己を包むといふ意義を有するが故に、それが個物的なるものをも包み、個物的なるものを限定する一般者と考へることができぬ。個物と考へられるものは絶対無の自覺のノエマ面に射影せられた行爲的自己と考へることができぬであらう。未だ行爲的自己の知的自覺の内容としてタートザツハリツヒと

いへないものでも、それが絶對無の自覺のノエマ面に於てザツハリツヒ即ち事物的なるものとして限定せられるかぎり、表現的自己の自己限定の内容として之によつて判斷的知識が成立すると考へることができる。之に反し知的自覺を越えた行爲自己の内容としてイデア的内容と考へられるのも、事實的として限定せられるかぎり、之によつて判斷的知識と考へられるものが成立すると考へることができる、歴史的知識といふ如きものは斯くして成立するといふことができるであらう。

我の内と考へるものは無限に深い、我々の生命の底には不可思議なるものがある、我が外と考へるものは無限に遠い、世界の奥には不可思議なるものがある。併し外と考へる時、外は内に於てなければならぬ、外の不可思議は内の不可思議でなければならぬ、非合理的なるものゝ合理化、そこに我々の自覺があるのである、絶對無の自覺といふのは絶對に非合理的なるものゝ合理化でなければならぬ。内的事實と考へられるものが即外的事實であり、外的事實と考へられるものが即内的事實であり、限定するものなくして自己自身を限定する事實そのものといふのが絶對無のノエマ的自覺の内容と考ふべきものでなければならぬ。自己自身を限定する事實と考へ

られるものは、絶對無の自覺のノエマ的内容としてそれ自身に於ていつでもノエシス的方向とノエマ的方向と有つて居る、内と外の意義を有つて居る。そのノエマ的限定の極限に於ては、單に無にして自己自身の内容を映す絶對無の自覺のノエマ面的内容として、單なる意味といふ如きものとなるであらう、即ち事實といふ意義をも失ふのである。併し元來、絶對無の自覺的限定に於ては、單なる無の限定といふことそのことが既に有の限定といふ意味を有つて居なければならぬ、否定は即一種の肯定でなければならぬ、相對的なる無は一種の有に過ぎないのである。故に限定するものなきものゝ限定といふ時、それは既に一種の行爲的限定の意義を有つて居なければならぬ、即ち反動的行爲的限定の意義を有つて居るのである。而してそれが行爲的限定の意義を有するかぎり、それに於てイデア的内容が事物的として見られるのである。我々の表現的限定と考へられるものも、それが絶對無の自覺のノエマ的限定として否定的行爲の意義を有するかぎり、それに於てイデア的内容が事物的として見られるのである。ロゴスの内容として考へられた希臘哲學のイデアは此の如きものでなければならぬ。併し否定の否定としての肯定に至つて、始めて我々は眞に絶對無の知的自覺に達するのである、事實が事實自身を限定する所に絶對

無の知的自覺があるのである。カントの意識一般といふものはかゝる意味の自覺でなければならぬ。我々の客觀的認識と考へられるものは實に之によつて成立するのである。我々が意識の志向面と考へるものは絶對無の自覺に於ては表現の野と考へられるものに當るのである、兩者共に自覺面をそのノエマ的限定の極限にまで押し進めたのに過ぎない。我々の意識面が自覺的と考へられるかぎり、之に於てあるものは内部知覺の事實といふ如きものでなければならぬ。内部知覺の事實は少くとも我々の意識内に於ては事實が事實自身を限定する意義を有するのである。而してそれはノエマ的限定とノエシス的限定との兩方向を有つて居る、之を外からと内からとから限定せられて居ると見ることが出来る。我々の知覺と考へるものは外からの限定と見ることができ、我々の衝動と考へるものは内からの限定と見ることが出来る。併し知覺といふのも、一種の意識作用として衝動的といふことができる。かういふ意味に於ては知覺の底に考へられた外的なるものも内的の意味を有つて來る、之に反し衝動といふもその底は不可知的である、かういふ意味に於て外的といふこともできる。斯く考へれば、内的と考へたものは外的であり、外的と考へたものは内的であり、我々の自覺的限定と考へるものはそれ自身の中に矛盾を



含み、かゝる自覺的限定の内容として見られたものは内部知覺の事實として、事實が自身を限定すると考へられるのである。絶對無の自覺的内容として限定するものなくして自己自身を限定する事實そのものといふものに於ても、ノエマ的限定とノエシスの限定との兩方向を有しそのノエシスの限定の内容即ち行爲的自己の自覺的内容として、イデヤといふものが見られるが、そのノエマ的限定の内容としては事物的なるものが見られるといふことができる。併し知覺が一種の意識作用として衝動的と考へられる如く、ノエマ的限定が又一種の否定的ノエシスの限定といふ意味に於て事物的内容がイデヤ的内容の意味を有つて居る。事物的内容と考へられるものは固イデヤ的内容の抽象的ノエマ面に映されたものといふ意味を有つてゐなければならぬ。而して斯く絶對無の自覺のノエマ的限定面として表現的限定面が自覺の意義を有するかぎり、之に於て事物的なるものが見られ、それが主語的なものとして判斷的限定が成立するのである。併し知覺の事實が自己自身を限定する自覺的事實でないと同様に、事物的なるものは事實が事實自身を限定するといふ如き絶對無のノエマ的自覺の内容ではない。事實的限定の底には表現すべからざるものがなければならぬ、表現そのものを否定するものがなければならぬ。而も

かゝる否定の否定としての肯定の立場即ち内的事實が即外的事實たる絶対無のノエマ的自覺の立場が、絶対に非合理的なるものゝ合理化の立場として、それによつて客觀界が構成せられると考へられるのである、カントの純粹統覺の立場といふ如きものはかゝるものでなければならぬ。

絶対無の自覺のノエシスの限定の方は姑く置き、そのノエマ的限定について云へば、抽象的に考へられたノエマ的限定面といふのは自己自身を限定するものなくして、單に映す鏡といふ如きものでなければならぬ。自己に於て自己を見るときいふ自覺的限定が無限の過程と考へられる時、そのノエマ的限定とノエシスの限定との兩方向に抽象的限定面といふものが見られなければならぬ。絶対無の自覺の抽象的ノエマ面といふのはすべての行爲的限定を否定して、單にその内容を映すといふ意味を有つたものでなければならぬ。之に於てあるものはすべてが影像である、その極限に於ては單なる意味となる。表現的限定といふのはかゝる抽象的ノエマ面的限定に基礎附けられて居るのである。併し何處までもノエシスがノエマを包むといふ意味に於てそれが尙絶対無の自覺のノエシスの限定のノエマ面たる意義を有するを以て、それに於て事物的なるものが見られねばならぬ。かゝる意味に於て表

現的自己の自己限定といふ考へられるものが廣義に於て判斷的限定と考へられるものであり、その内容が概念的知識と考へられるのである。併し絶對無の自覺のノエマ面がそのノエシスの限定の意義を得て來るといふことは、それが無にして見るものゝ自覺面の意義を得て來ることである、即ち抽象的限定面が具體的限定面の性質を帯びることである、それに於てあるものが自己自身を限定する事實そのものゝ性質を帯びて來ることではなければならぬ、絶對無の自覺のノエシスの限定の意義を有することによつて、既に一種の行爲的自己の自己限定の意義を有つて來なければならぬ。それで事物的と考へられるものは一面に於て行爲的自己の自己限定の内容の意義を有つてゐなければならぬ、それは行爲的自己の自己限定の内容として見られるイデヤ的性質を有つと考へられねばならぬ。直覺の内容として一種の客觀的なるものが認められる如く事物が自己自身を限定する考へられる時、そこに既に絶對無の自覺のノエシスの限定としての行爲的自己の自己限定の意味が含まれてゐなければならぬ。併しそれは未だ自覺に至らないのである、絶對無の自覺のノエマ面と考へられるものがそのノエマ的自覺に至つた時、即ち絶對無の知的自覺に至つた時、はじめて眞に事實が事實自身を限定すると云ふことができる、内的事實が

即外的事實であり、外的事實が即内的事實であると云ふことができる。我々の意識的限定と考へられるものも、元來、絶對無の自覺のノエシスの限定の意味を有つたものである、事實が事實自身を限定するといふ自己限定に即して考へられるものである、即ちそのノエシスの限定の意義を有する内的事實の限定として考へられるものである。事實が事實自身を限定するといふ絶對無の知的自覺のノエシスの限定がノエマ的限定を包む意義を有つた時、それが行爲的限定と考へられるが、事實が事實自身を限定するといふだけの意義のものが意識的限定と考へられるものである。故に意識的自己の自己限定は、絶對無の自覺のノエシスの限定といふ意味に於てその底に行爲的自己の自己限定の意義を有すると共に、行爲的自己の自己限定の意義を極小にして、絶對無の自覺のノエマ的に即したノエシスの限定としては表現的自己のノエシスの限定の意義を有つといふことができる、志向的と考へられる所以である。元來、表現的自己のノエシスの限定といふべきものは體驗と考へられるものであらう。我々の體驗と考へるものは絶對無の自覺の抽象的ノエマ面的限定に即したノエシスの限定といふべきものである。體驗が絶對無のノエマ的自覺の意義を有つ時、即ち行爲的自己の自己限定の意味を有つ時、そこに意識的自己の自己限定

が考へられるのである。意識的自己の自己限定といふのは體驗的にして而も行爲的自己の自己限定の意義を有つたものと云つてよい。志向的としては、我々の意識面と考へられるものは何處までも表現的自己のノエシスの限定に伴うて行くといふことができる。唯それが行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎり、絶對無のノエマ的自覺の意義を有し、意識範圍内に於ても事實が事實自身を限定すると考へられる、そこに我々の意識的自己の自覺的限定の意義があるのである。意識的自己が自己自身を超越して超越的自己の自己限定の立場に至るといふことは、その行爲的自己の自己限定の意味に於て之を越えて絶對無のノエマ的自覺の立場に至るといふことでなければならぬ、即ち内的事實即外的事實の立場に至ることである。それが絶對無のノエマ的自覺の立場として此に於て意識的自己の行爲的意義が消されると考へることができ、單なる規範意識と考へられる所以である。表現的自己の自己限定としての意義から云へば、かゝる立場に於て意識的自己の自己限定として事物的なるものが見られ、判斷的限定が成り立つといふことができる。但し事物的なるものは單なる意識内容として見られるのではなく、行爲的自己の自己限定の意味に於て見られたものでなければならぬ。表現的自己のノエシスの限定が體

驗と考へられるものであり、體驗が行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎりそれが意識的自己の自己限定と考へられると云つたが、かゝる意味に於て意識的自己が行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎり、それに於て表現的自己の自己限定の内容の意義を有する事物的なるものが見られるのである。我々の志向的意識面は何處までも表現的自己のノエシス面に伴ふと考へ、かゝる意識面が表現的自己のノエシスの限定面として、面そのものが行爲的自覺の意義を有つと考へられた時、それが範疇的限定面と考へられるのである。かゝる意味を有つた範疇的限定面に於て事物的なるものが對象化せられるのである、表現的自己の自己限定が行爲的自覺の意義を有するかぎり判断的限定が成立するのである。我々の意識が體驗として單に表現的自己のノエシスの限定の意義を有する時、それに於てあるものは單に志向的と考へられるが、表現的自己の自己限定の意義を有つ時、事物的なるものが對象化せられる。判断的知識といふのは、我々の意識内容と考へられるものが表現的自己の自覺的内容の意義を得ることによつて、成立すると考へることができ、それが我々の意識内容が範疇的に限定せられるといふことを意味するのである。我々の思惟といふのは固、行爲的自己の自己限定の意義を有つた表現的自己の自己限定

を意味するものである、それによつて事物的なるものが限定せられるのである。アリストテレスの範疇といふのはかゝる意味に於ての範疇といふべきであらう、言表的限定の範疇である。併し眞に事實が事實自身を限定する絶對無の知的自覺の内容といふべき客觀知識が限定せられるには、表現的自己のノエシスの限定は絶對無の知的自覺の意味を有つて來なければならぬ、それは單なる思惟的主觀ではなくして直觀と結合した主觀でなければならぬ、否直觀を内に包んだ主觀でなければならぬ。直觀的内容と考へられるものは行爲的自己の自覺的内容を意味するのである、絶對無の自覺のノエマ的限定と考へられるものは行爲的自己を否定しそのノエマ的内容を包む意義を有つて居るのである。體驗にして而も行爲的自己の自己限定によつて裏附けられたものが、我々の意識と考へられるものであると云つたが、かゝる意味に於てそのノエシスの限定の極限に於て、即ち意識的自己の自覺に於て、外的即內的として事實的内容が見られなければならぬ、それが我々の内的知覺と考へられるものである。我々の意識的自己がノエシスの限定の極限に於てその行爲的限定の意義を越えて絶對無の自己のノエマ的自覺の意義を得ることによつて事實的内容が直觀せられるのである。而してかゝる直觀の形式が「時」と考へられるもので

なければならぬ。限定するものなくして自己自身を限定する事實そのものを限定する絶對無のノエマ自覺の形式といふものは「時」といふ如きものでなければならぬ。行爲的自己のノエマ的内容と考へられるものはすべて「時」に於て限定せられるのである。それが抽象的ノエシスの限定としては我々の内的感官の形式と考へられるのである。カントの意識一般と考へられるものはアウクスチヌスの過現未を包む記憶といふ如きものでなければならぬ。それ故にカントの範疇といふものは絶對無のノエマ的自覺即ち知的自覺に至つた表現的自己のノエシス面的限定の形式を意味するものでなければならぬ。我々の意識面に於て志向的對象と考へられたものは、それに於ては自己自身を限定する自覺的對象となるのである、即ち超越的對象と考へられるものである。表現的自己の自己限定が行爲的自覺の意味に於てその極限に至れば、アリストテレスのヒポケーメノンといふ如きものに至るであらう。併しそれが尙絶對無の自覺の抽象的ノエマ面的限定の意義を脱せないかぎり、眞の事實といふものに到達することはできない。絶對無のノエマ的自覺の立場に於て始めて事實が事實自身を限定するといふことができ、客觀的對象の認識は之によつて成立するのである。斯く絶對無のノエマ的自覺の立場といふのは表現的自



己が行爲的自覺の意味を有つたものとしては、それが自己自身の内容を見ると考へることもできるであらう。さういふ意味に於ては、そこにイデア的内容が見られると考へることもできる、事物的なるものがそれに於てイデアとなると云ふこともできる、自然のイデアと考へられるものは此の如きものであらう。併しそれが絶對無の自覺的内容としては、そこにイデア的なるものが否定せられる意義がなければならぬ。事實が事實自身を限定するとして、そこに我々の行爲的自己の自己限定に對して絶對に非合理的なるものがあるものでなければならぬ。自然のイデアと考へられるものはかゝる意味に於て眞のイデアではない。眞のイデア的内容といふのは自己自身を限定する事實そのもの、ノエシスの限定の方向に見られるものでなければならぬ。事實が事實自身を限定するといふ絶對無の自覺の抽象的ノエシスの限定が行爲的自己の自己限定と考へられるものであり、かゝる行爲的自己の自覺的内容がイデアと考へられるものである、イデア的内容といふのは絶對無の自覺の抽象的ノエシス面的限定の内容といふことができる。イデア的内容を見るといふには、我々は事實的なるものから出立せねばならないが、事實的なるものが行爲的の自覺的内容として限定せられるかぎり、イデア的なるものが見られるのである。

併し我々の行爲的限定といふのが抽象的ノエシスの限定であるかぎり、自己自身を限定する事實は何處までもイデヤ化することはできない。私は上に事實といふのは廣義に於ての歴史的事實といふべきものであると云つたが、歴史的事實の底には何處までもイデヤ化せられないものがあるのである。

事實が事實自身を限定するといふ様に事實自身の自己限定から出立して云へば、その兩方向に絶對無の自覺の二つの抽象的限定面といふものが考へられるであらう。併し絶對無の自覺の立場から云へば兩方向に二つの抽象的限定面があるのではない。自覺的限定といふのは無限に自己の中に自己を見て行くことである、眞に見るものなくして見る絶對無の自覺に至つて、そのノエマ的自覺の内容とも云ふべきものは自己自身を限定す事實そのものと云ふべきであらう。而してそれはノエシスの意義に於ては眞の自己といふべきものである、心卽是物物卽是心といふべきである。絶對無の自覺の立場から云へば、自己の中に自己を見る自覺的限定といふのは絶對無限の流ともいふべきであらう、絶對の無より流れて出でて絶對の無に流れ去る無限の流ともいふべきである、寒山子の所謂尋窮無限水源窮水不窮である。かゝる意味に於て眞に有るものは自己自身に於て矛盾するもの、自己の存在そのも

の矛盾といふべきものでなければならぬ。而してそれが眞の自己といふべきものである。かゝる自己のノエマ的限定の内容が眞に自己自身を限定する事實そのものと考へられるのである。かゝる自己そのものは固より見られないものであるが、かゝる自己のノエシス的内容がそのノエマ的内容たる事實そのものに即して見られるかぎり、行爲的自己といふものが考へられ、その自覺的内容がイデヤと考へられるのである。併し絶對無の自覺のノエシス的限定の底は何處までもかゝる意味に於て見ることはできない。その極限に於て行爲的自己は唯無内容なる自由意志と考へる外はない。かゝる自由意志的自己の自己限定面と考へられるものは絶對無の自覺のノエシス的限定によつて裏附けられたものとして、絶對無の自覺のノエマ的限定によつて裏附けられた表現的自己の自己限定面と絶對無の自覺の立場に於ては一つの自己限定面たる意義を有つて居ると考へることができ。即ちそのノエマ的限定の意義に於て表現的自己の限定面と考へられそのノエシス的限定の意義に於ては自由意志的自己の限定面と考へられるのである。自己の中に無限に自己自身を見て行く絶對無の自覺の立場に於て、ノエマ的自覺の内容が見られるかぎり、それを即して行爲的自己と考へられるが、もはやかゝるものが見られなくなつた時、

即ち我々が自己自身を失つたと考へる時、かゝる自覺的限定のノエシスの限定の意義に於て自由意志といふものが見られ、そのノエマ的限定の意義に於て表現的自己といふものが見られる。即ち自己否定の方向に於て表現的限定といふものが見られ、自己肯定の方向に於て自由意志といふものが見られるのである。故に上に表現的自己のノエシスの限定と考へた體驗の底に、我々は我々の自由意志を見るのである。加之、行爲的自己によつて裏附けられた我々の意識的自己の底に於て、我々は我々の自由意志を見るのである。斯く表現的限定と自由意志とは無限に深い絶對無の自覺面のノエマ的限定とノエシスの限定との意義を有するが故に、自由意志は何處までも行爲的限定を越えて之を包むといふ意義を有すると共に、表現的限定は何處までも對象的限定を越えて之を包むといふ意義を有つて居る。かゝる自覺的限定は一方に於ては抽象的とか形式的とか考へられると共に、一方に於ては表現することのできない又見ることのできない深い自己の自己限定の意義を有つて居るのである、さういふ意味に於て却つて絶對無の自覺そのものゝ相を有つて居ると云ひ得るであらう。自由意志とは最も深い意味に於て自己自身を限定するものなくして自己自身を限定する自己限定といふことができる故に、我々の自由意志的自己と

考へるものが一面に對象的限定の破壊者として、それによつてノエマ的方向に單なる意味といふものが見られると考へることができ、又それによつてノエシス的方向にドクサが構成せられると考へられるのである。單なる志向作用と考へられるものも我々の意識面がかゝる自由意志的自己によつて裏附けられるかぎり成立するのである。併し今右に云つた如き絶對無の自覺の抽象的限定面のノエシス的方向といふべき自由意志的限定に關しては後日の論に譲り、そのノエマ的限定ともいふべき表現的限定について云へば、我々の表現的自己の自己限定と考へるものはかゝる自己のノエマ的限定としてすべての行爲的自己の自己限定の内容を包み、行爲的自己の自己限定の内容はすべて表現の野に於て表現せられるといふことができる。而して言表といふものが勝義に於ける表現と云ひ得るが故に、すべての行爲的自己の自己限定の内容はロゴスの的に限定せられると考へることができ、すべて行爲的自己と考へられるものは主語的有として表現的自己のノエシス的限定面即ちその場所に於てあるものと云ふことができるのである。かゝる意味に於ては、希臘哲學が最も一般的な概念的知識の意義を有つて居るといふことができる。併し眞理と考へられるものは固表現的自己の自覺的内容の意義を有つたものでなければな

らない。行爲的自己の自覺的内容といふものが見られるかぎり、そのノエマ的内容が事物的として、それによつて判斷的知識が成立すると云ひ得るであらう。併し表現的自己の自己限定の極限に於て、それが絶對無のノエマ的自覺の意義を有つた時、即ち事實が事實自身を限定するといふに至つて、はじめて客觀的知識が成立するのである。アリストテレスといへども此の立場に至らなかつたと云はざるを得ない、個物といふもそれは尙イデア的本體であつて事實ではない。併し絶對無のノエマ的自覺の立場と表現的自己の自覺の立場といふのは一つの點に於て相觸れると云ひ得るであらうが、此の二つは自ら異なつた立場でなければならぬ。絶對無のノエマ的自覺の立場に於ては所謂經驗的世界と考へられるものが成立し、客觀的知識が限定せられると云ひ得るであらうが、表現的自己の自己限定と考へられる判斷的限定即ち思惟そのもの、自覺的内容として數學的世界といふ如きものが成立するのである。絶對的の自覺のノエマ的限定の意義を有する表現的限定と考へられるものが抽象的ノエマ的限定としてすべての行爲的限定を否定する意義を有すると共に、それ自身が又反動的行爲的限定の意義を有つと考へ得るであらう。それが所謂反省として思惟と考へられるものであり、かゝる作用的自覺の内容が純粹思惟の

直觀的内容として數の世界と考へられるものである。而して表現的自己の自覺的内容を眞理と考へるならばかゝる意味に於ける自覺的内容が勝義に於て眞理と考へ得るものであらう、數の世界について我々は十全なる知識を有つのである。經驗的事實の世界の知識は客觀的と云ひ得るであらう併し我々はそれについて十全なる知識を有つことはできない。數の世界と考へられるものは斯く作用的自覺の内容たる意義を有するを以て、それは一種のイデア的内容の意義を有つと考へることができる。客觀的事實を限定するイデアと考へられるものは數の如きものでなければならぬ、プラトンが晩年に於てイデアを數と考へたといふのも必然の結果であつたかも知れない。嚴密なる意味に於て物理的世界といふものは、上に云つた様にイデア的内容として考へることのできないものである。歴史の世界はイデア的内容とも考へられるが、歴史の根抵にもイデア的なるものがあるのではなく、自己自身を限定する事實のノエシスの限定の内容として歴史といふものが考へられるのである。唯それが所謂自然界とは反對にノエシスの限定の内容なるが故に、深き意味に於ける行爲的自己の自覺的内容の意義を有し、イデア的に見られるかぎり歴史的内容といふものが見られるのである。ロゴスに即して見られた希臘のエードスは有

るものとしては、何處までも事物的なるものといふ意義を脱し得ないであらう。それは直に自然や歴史の根抵となるものではない、兩者の根抵には自己自身を限定する事實そのものがなければならぬ。併し事實が事實自身を限定するといふのは固絶對無のノエマ的自覺を意味するものであるから、そのノエシ的限定といふべきものは我々に深い内的生命と考へられるものでなければならぬ、ノエシ的限定の意義に於ては事實は即生命である。行爲的限定といふのは屢々云つた如くノエマ的自覺に即したノエシ的限定たるに過ぎない。而して我々が行爲的に自己自身の自覺的内容を見ることができない深い内的生命の底に至つた時、それに對應してそのノエマ的限定面として上に云つた如く表現的自己の自己限定面といふものが考へられるといふことができる。かういふ意味に於ては、絶對無の自覺の抽象的ノエマ面として表現の野と考へられるものが却つて直接に我々の内的生命の内容を映すといふことができる。 *Am farligen Abglanz haben wir das Leben* といふべきである。(未完)